鍬潟はそんな事は知らんので、當日まで日が五日あるので、荏の油を買ふて來て、毎日刷毛で身體へ荏の油を塗つては日に干し、油を塗つては乾燥かし」

「サヨ〳〵、紐を通して獨樂を付けて引張り」

「ソレは天窓ぢやが、愈々當日と成つて相撲も追々取り進み、愈々雷電鍬潟と成ると、呼出しが扇をひろげて聲を自慢に、エー西シ……鍬潟、鍬潟……。エー東シ……雷電、雷電……。名乘りを上げると、なんしろ大きな雷電は、土俵へ登るのもノソリ〳〵、鍬潟は小さいので、土俵へ登るのもチョコ〳〵と登つた。大きうても小さうても、する事にや變りは無い。ドスン〳〵と四股を踏んで、力水をつける。角力取と云ふ者は身體がハシヤグと見えて、水をブウ〳〵吹き掛けて布袋斗をする。化粧紙を取つてフンと鼻をかんで、丸めて捨てゝ仕舞ふ人があるかと思ふと、四ツに折つて四本柱の根元へ埋める人もある　立行司は軍扇を持つて。東西々々……夥多番數も取り進みましたる處、片や鍬潟、鍬潟には此方、雷電。雷電……。是れ一番にて今日の打止めエー。見物はウワーと大喜びや。双方充分に仕切つて、雷電がヨイショツと立ち掛けると、鍬潟が待つたと云ふ。又仕切直して雷電がヨイショツ。鍬潟が待つた。何んと待つたが八十五遍」

「なんでだすネ」

「雷電は身體が大きいので、立つたり坐つたりすると身體が草疲れて來る。鍬潟はそれを待てよるのや

「ア。全でベテンだすな」

「左様や。雷電も去る者、それ位の事は百も承知、よし百遍まで待つてやるワイと、氣を拔いて仕切つて居ると、鍬潟がどうした拍子か不意にヨイショと聲を掛けた、雷電あわてゝ立ち上つたが、鍬潟は飛び込んで取組まうとせぬ、遙か後ろへ飛び下つて、土俵の二字口へ立ちはだかるなり、ヨイショと大手を擴げた。ヤ雷電が怒つたの怒らぬのや無い、おのれ指で突いても倒れる奴、ヨシ今日は一番米屋にしたり、褌にしたり、根附にして遣らうと、鍬潟の肩をムンヅと掴まうとするとツルツと辷る手を引張らうとするとツルツと辷る、まるで天婦羅と相撲を取つてる樣で力の入れ處が無い。エイ面倒なと後ろ褌を掴みかゝると、鍬潟はハツと身を縮めて雷電の股を潜つて後ろへ廻るなり脚の折れ踞みの處を一つドーンと突いたのや。身體こそ小さけれ、大阪名代の怪力士と云はれた鍬潟三吉に、渾身の力を兩腕に込めて不意を突かれたのやから堪らん。流石の雷電も仰向けにドーンと引轉り返つて鍬潟がヌツと佇てる、行司も狼狽たへたが勝負は至つて判然してるのやから仕方が無い　軍配をサツと西へ上げて、勝角力鍬潟アと名乘りを上げると、仰山の見物が、思はず一時に、ウワーツと上げた其聲が、天は三十三天、地は奈落の底、龍宮まで聽えて乙姫はんが頭痛病みに成つたが未だに癒らぬと云ふ位。雷電不思議で堪らぬ。何んで彼樣な鈍な角力を取つたであらうと、我が部屋へ歸つて手を嗅いで見ると荏の油の香ひがする。已れ卑怯な鍬潟奴、計略にかけて人に耻辱を與へたナ、ひねり潰